

創世記11章1－9節 「天に向かい、散らされた者たち」

1A 自分を高める者

1B 偽りの安心

2B 自分の名

3B 天に届く塔

2A 低められる者

1B そこにおられる主

2B 引き上げる方

3B へりくだり、高められた主

本文

創世記 11 章を開いてください。私たちは聖書通読の学びをしていますが、創世記 9 章まで来ました。午後の礼拝で、10 章と 11 章を一節ずつ見ていきます。今朝は 11 章 1-9 節をお読みします。

「¹さて、全地は一つの話しことば、一つの共通のことばであった。²人々が東の方へ移動したとき、彼らはシニアルの地に平地を見つけて、そこに住んだ。³彼らは互いに言った。「さあ、れんがを作って、よく焼こう。」彼らは石の代わりにれんがを、漆喰の代わりに瀝青を用いた。⁴彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」⁵そのとき主は、人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた。⁶主は言われた。「見よ。彼らは一つの民で、みな同じ話しことばを持っている。このようなことをし始めたのなら、今や、彼らがしようと企てることで、不可能なことは何もない。⁷さあ、降りて行って、そこで彼らのことばを混乱させ、互いの話しことばが通じないようにしよう。」⁸主が彼らをそこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てのをやめた。⁹それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。そこで主が全地の話しことばを混乱させ、そこから主が人々を地の全面に散らされたからである。」とても有名な、バベルの塔の話です。

1A 自分を高める者

バベルの塔について、一言でいうならば、「自分を高める者は、低められる」です。ノアの時代の洪水後、主はノアを祝福して、「**生めよ。増えよ。地に満ちよ(9:1)**」と命じられました。けれども、彼らは、地に満ちるのではなく、一つのところに集まって、町を建て、天に届こうとしたのです。

1B 偽りの安心

彼らがまず行ったのは、偽りの安心を得ることでした。3 節に、「**彼らは石の代わりにれんがを、漆喰の代わりに瀝青を用いた**」とあります。家などを建てるのに、なぜ石ではなく煉瓦にしたのでしょうか？また、漆喰ではなく瀝青、すなわちアスファルトを用いたのでしょうか？それは、ノアの時

代のような洪水から、自分たちを守るためです。

ノアとその家族が水の裁きから守られたのは、主に従ったからです。主が箱舟を造り、その中に入りなさいと命じられました。それで、主が箱舟によって彼らを守りました。主こそが、彼らの安全を守られます。ところが、彼らは自分たちで守ろうとしました。そして、そもそも、大洪水で大地をのろうことはすまいと、主は約束されていたのです。ですから、それに安心して、いろいろな所に行き、住めばよいのです。ところが、彼らは一つのところに集まり、そして洪水対策の家を建てました。

これが、神を認めない人の姿です。人は、神によって守られているというところで、初めて安心を持つことができます。ところが、神を認めないので、自分自身で守られなければいけない。自分自身は大丈夫、と言ったら、自分を偽っています。自分は裸のままでは、生きていけないのです。自分が守られていると言う安心感があって、初めて生きています。だから、自分を保証するもので、自分自身に着せていくのです。お金であったり、地位や成績であったり、見た目であったり、

これは、神を受け入れたとされるクリスチャンでも起こり得ます。種蒔きのたとえで、世の思い煩いで、富の惑わしで、実を結ばないとあります。自分の生活で、これをしないといけない、あれをしないといけないとして、肝心の主の命令はどうなったのですか？となってしまいます。主が言われたことであれば、たとえ失うものがあったとしても、それを得るはずです。しかし、思い煩い、しがみつくのです。

2B 自分の名

次に彼らのしたことは、「われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう」名をあげようということです。言い換えると、自分の計画、自分の知恵、自分の力、ともかく自己実現のために邁進することです。主語が自分になっていて、そこに神、またキリストが入っていないければ、必ず自分の名のゆえに生きている、自分を高めるために生きていると言えます。

このバベルの町は、後にバビロン帝国の都となります。その王ネブカドネツアルが、獣のように卑しくなる出来事が起こりました。それは、彼が次のようにつぶやいたからです。「ダニ 4:30 この大バビロンは、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が私の権力によって建てたものではないか。」私の威光、私の権力によって、私が・・・として、主語がずっと私なんですね。それで、彼は低められました。

これをしよう、あれをしようと、自分で計画を立てることの愚かさは、イエスご自身も金持ちのたとえで語られました。「ルカ 12:16b-19 ある金持ちの畑が豊作であった。17 彼は心の中で考えた。『どうしよう。私の作物をしまっておく場所がない。』18 そして言った。『こうしよう。私の倉を壊して、もっと大きいのを建て、私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。19 そして、自分のたましいにこう言おう。『わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べ

て、飲んで、楽しめ。』』

豊作になること自体、富が集まること自体が悪いものではありません。そうではなく、そこに神が全く介在していないのです。私の作物、私の倉、私の穀物や財産、自分のたましいと、私、私、私となっています。主のみこころならば、という言葉がないのです。主が、富を増やされたのだという言葉がないのです。みこころならば、これこれをしようとして生きるべきで、なぜなら、その日に自分のいのちが取られるかもしれないのです。事実、イエスは、この金持ちがその日の夜、死ぬことを宣言されています。何が起るかわからないのです。

自分の名ではなく、主の名を高めます。12 章には、主がアブラハムに対して、「**あなたの名を大いなるものとする(2 節)**」と約束されています。では、アブラハムは、自分の名を高めたでしょうか？いいえ、「**主のために祭壇を築き、主の御名を呼び求めた。(12:8)**」アブラハムにとって、自分の名が高められることではなく、主の名を呼び求めたのです。ですから、そこにはアブラハムは高められますが、主ご自身の名が広がります。自分の王国ではなく、主の御国が広がるのです。

3B 天に届く塔

そして、「**頂が天に届く塔を建てて**」と言っています。その地域は、ジグラトと呼ばれる、階段式のピラミッドのような建物を建てていました。その頂で、神々に会い、そして自分には神々の権威と力、威光を身にまといます。神に到達したかったのです。

人には、神を心の中で求めています。神はいないと言っている人も、実は、神を求めています。その飢え渴きを、何かで埋めようとします。自分の行いで、自分の努力で、自分の行為で到達しようとするのです。あるいは、宗教的な行為によってでさえ、到達しようとする。自分が一生懸命祈るなどして、神から受け入れられようと思うのです。

2A 低められる者

しかし、ここの人々は、主が降りてこられて、ことばをばらばらにされました。それで、塔をいっしょに建てることができなくなり、それで散り散りになるのです。自分たちは、散りたくないと思って一つに集まりましたが、結局、強制的に別れ別れになったのです。おそらく、家族の中では一つのことばなのでしょう、それぞれが別れて住み始め、その子孫が広がり、そしていろいろな民族に分かれ出るようになります。

主は言われました。「ルカ 14:11 **なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。**」自分が高く、高く、高見まで行けば、そこからただ落ちてしまいます。それはあたかも、ロケットのようです。自分がどんなに高くロケットの中に入って、飛んでいったとしても、その後は下がるしかないのです。しかし、そこから主の福音が始まります。自分が低められ

れば、高められるのです。

1B そこにおられる主

ヒルソングの歌で、Touch the Sky というものがあります。直訳は「空に触れる」という意味です。日本語訳がありますが、冒頭はこう書いてあります。

「世の輝き求め 高みまでのぼり
地に落ちた時に 主の愛を見つけた

いのちを捨てたら いのちを与えられ
御霊注がれて ひれ伏し 天に触れる」

分かりますか、自分が成功して、上へ上へ上りつめて、高見まで来ました。けれども、それから、地に落ちるだけです。けれども、地に落ちた時に、主の愛を見つけたのです。それだけでありません。落ちた時に、いのちを献げ、その時に御霊が注がれて、天に触れると言っています。そう、低くされた時に、実はその落ちて行ったところで、天に触れるのです。天が、ずっとずっと上にあると思ったら、低められた自分のところに、天があったという逆説です。

先ほど、ネブカドネツアルが自分を高め、獣のようになってしまった話をしました。けれども、定められた期間が過ぎると、彼は主がそこにおられることを知ります。「ダニ 4:34 その期間が終わったとき、私ネブカドネツアルは目を上げて天を見た。すると私に理性が戻ってきた。私はいと高き方をほめたたえ、永遠に生きる方を賛美し、ほめたたえた。その主権は永遠の主権。その国は代々限りなく続く。」

私たちは、自分で這い上がっていると、落ちるのを恐れます。自分が山を登っていて、ここで足を踏み外して落ちたら、深い淵まで落ちて、暗闇に投げ込まれると恐れます。しかし、むしろ自分を捨てて、いのちを主に献げたら、その落ちたところに、限りない神の愛が待っているのです。神の御手が、落ちるあなたを押さえてくださるのです。暗闇どころか、光の中に招き入れられます。神のいのちと光は、自分を低くするものに流れ、輝くのです。

2B 引き上げる方

そして、主は、へりくだる者を高くされます。ネブカドネツアルも、その後、王位が戻りました。威光と力も戻りました。しかし、彼はもはや、自分が成し遂げたとはいません。事実、主がそれをされたことを告白します。「4:37 今、私ネブカドネツアルは、天の王を賛美し、あがめ、ほめたたえる。そのみわざはことごとく真実であり、その道は正義である。また、高ぶって歩む者をへりくだらせることのできる方である。」

ダビデも、偉大な名が与えられましたが、彼もまた、主にあって高められた人です。主が王位をサウルから奪い取り、ダビデに与えたのですが、彼は決して自分の手で、王位を取ることはありませんでした。彼がイスラエルの王となり、王国が栄えた時、こう言いました。「Ⅱサム 5:12 ダビデは、【主】が自分をイスラエルの王として堅く立て、主の民イスラエルのために、自分の王国を高めてくださったことを知った。」主が自分を立ててくださいました。また民は、自分の民ではなく、主の民です。そして、主が自分の王国を高められたのです。

私の救いは、ここから来ました。父から人生訓のようなものを、初めて聞いたのは、映画を見た後です。ランボーという映画で、兵士が独りで戦います。父は、「人生というのは、戦いだ。」と言いました。中学校に入り、高校に行きますが、良い高校に行き、それから大学も良い大学へ、そして大企業に進むと言うことを、ほのめかしていたと思います。それで私は中学校の時、成績が良かったです。それで県で一位の高校に入りました。

初めは成績が上位でした。けれども、他の子たちも成績がいいからその高校に入ってきたわけで、自分が授業の内容について行くのが難しくなってきたとき、とてつもない恐れが出てきました。良い大学にいて、一流企業に入るという道以外を知らなかったからです。それで抑鬱状態に陥っていったのです。そして、かろうじて指定校推薦で大学に入りました。そこでやり直そうと思ったのです。英語で討論するサークルに入り、試合に励みました。一位になると思っていたら、びりでした！そこで気付いたのです、周りの人たちがとても不満であり、私が他人を顧みないで動いていたことを指摘しはじめました。

一位だと思ったら、びりで、しかも皆に嫌われます。私は、どうすればよいか分からなくなりました。それで教会に行ってみました。その時は何とも思いませんでしたが、かつて、受験勉強で落ち込みながら勉強していた、自分の部屋に一人になりました。人を蹴落として生きてきたのではないかと恥じました。そして、祈って見ました。「生まれてこの方、あなたを無視していました。ごめんなさい。」こんな惨めな自分なのに、そこで、頭のとっぺんからつま先まで、自分を受け入れ、包んでくださる神がおられることを知ったのです！「ありがとうございます」と泣いて、祈りました。

3B ヘリくだり、高められた主

なぜ、自分が低くなると、高められるのでしょうか？それは、私たちの主イエス・キリストご自身が、「低くされ、それで高められた方」だからです。「ピリ 2:6-9 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、8 自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。」主ご自身が、神の身分であられたのに、低くされて、しもべの姿を取られたのです。そして、十字架の死に至るまで、ヘリくだられたのです。それで、神がよみがえらせ、この方を引き上げら

れました。すべての名にまさる名を与えられました。

それゆえ、私たちが自分を低くする時に、主ご自身が現れてくださるのです。そして、その栄光の姿、高められた姿をも、恵みによって見せてくださいます。そうすることによって、自尊心が保たれます。それは、主によって愛されて、安心であること。もはや、自分で自分を守る必要はありません。そして、自分が神の子となり、恵みを受け、高められていることです。なぜなら、自分は主につながる者だからです。もはや、その空白を自分で埋めようとしなくてよくなりました。だから、恵みによって、高められていることに留まります。それで、初めて、自分を保っていることができます。他の人と比べる必要はありません。